

初めて大津膳所の義仲寺を訪れたとき、木曾義仲の墓の傍に芭蕉の墓があることに驚いた。生前からの遺言だったとのこと。「夏草や・・・」の名句を詠むなど、判官びいきではあったようだが、その義経以上に義仲に想いを寄せていたとは！ 西行法師の墓の傍なら納得できるが。

たしかに義仲は時代を変えた先駆的英雄である。旧来の仕来りに囚われない自由な発想と行動力は、芭蕉とも共通する。だがその面では信長の方がより相応しい。幽玄閑寂を旨とした芭蕉が、その正反対とも思える武骨な義仲を慕ったのはなぜだろう。磁石の＋と－の作用と同じか。

義仲寺は京や伊賀にも近い交通の要衝で風光明媚な近江湖畔に建つ。生前にも一時期、芭蕉はここに庵を構えている。多くの門人が墓参りに来やすい地点でもある。しかしそのような理由では余りにも俗っぽく、彼らしくない。

芭蕉は「奥の細道」行では義仲の進軍ルートである北陸道を歩んでいる。だが最大の古戦場である倶利伽羅峠については、「卯の花山・くりからが谷をこえて、金沢は・・・」と地名を記すのみ。

敦賀での句会では前日に通った義仲の城址、燧が城について

義仲の寢覚の山か月悲し

と詠んだが、『奥の細道』本文ではその句を省いている。

永久の住処を義仲寺とした理由を敢えて謎として遺したのではないか。

今回の「奥の細道」行では彼の遺した謎に迫りたいと倶利伽羅峠に向った。越中と加賀の国境にある小高い山地である。今も旧北国街道が残っており、歩いて越えたかったが、出発地点へ戻る足の便がなく、源平ラインを車で行く。

義仲の火牛の計にはまり、平家の公達以下の大軍が落下した地獄谷などを頂上の展望台から見渡す。芭蕉も同じ景色を見た筈だ。ここで大勝した翌年には近江粟津で最期を遂げた義仲に想いを馳せたに違いない。

照りつける太陽と義仲が重なり、此の地で「不易流行」「月日は百代の過客」の思想を固め、次句を途中吟じたのであろう。

あかあかと日はつれなくも秋の風